

I 教育理念の形成過程

① 哲学館設立の背景

設立の原点は哲学

東洋大学の前身「哲学館」は明治二十年（一八八七年）に創立された。当初はその名が示すように「哲学専修の一館」すなわち哲学を教授するための専門学校であった。それから一世紀を経て今日のような総合大学へと大きな変貌をとげるまでには、内的または外的な状況の変化に伴ういくつものターニング・ポイントがあったが、そこで行われる教育に一貫して流れているもの——哲学館創立の精神——は変わることなく引き継がれてきた。それは現在では「諸学の基礎は哲学にあり」という言葉で象徴的に示されている。

哲学館の創立者井上円了は、哲学は「思想錬磨の術として必要な学問」で、人は肉体を錬磨するために運動や体操をするように、精神を錬磨するために哲学を学ぶ必要があると考えた。つまり、哲学館では哲学を教授するとはいつても、哲学者を養成しようとした

のではなく、ごく一般の人々が哲学を学ぶことによって、「ものの見方や考え方の基礎」を身につけることを教育目的とした。このような独特の教育内容を持った学校は、ほかに例をみない極めて特異な存在であった。

東洋大学のように明治時代に創立された私立大学は、いずれも当初はなんらかの専門学校であって、その専門分野がそれぞれの学校の特色となっていた。それらは内容的には大きく二つに分類することができる。第一は法律や医学などのように実用的な学問を教える学校で、これらは文明開化によって西洋から取り入れられた新しい学問、知識、技術などの普及を目的としていた。第二は特定の信仰に基づいて設立された学校で、キリスト教の布教活動の一環であったり、仏教の僧侶の教育が目的であったりした。哲学館の哲学も西洋からもたらされた学問には違いないが、普遍的で根本的な真理を求める学問であるという点に特徴がある。また、哲学を応用するという意味で宗教家の養成も哲学館の目的の一つに掲げられていたが、これも特定の宗教とか宗派に限定したものではなかった。この点からみて、哲学館は二つのいずれにも分類することができないのである。

ところで、専門学校の特色というものは、いかえれば建学の精神の違いくらいということにも

なるが、そこには創立者（個人の場合も団体の場合もある）たちそれぞれの教育理念が反映している。その理念が形成されるには、彼らが受けた教育や信じた宗教、あるいは育った環境や社会状況、そして活動をともした仲間たちといったようなさまざまな要因があった。井上円了が哲学の重要性を認識し、哲学館を設立するに至った背景にもそうした要因があり、それらを知ることがは東洋大学の原点を理解するために必要なことである。

西洋との出会い

明治十四年九月、井上円了は二十三歳で東京大学文学部哲学科に入学したが、これが彼と哲学との出会いであった。長年求めてきた真理は儒教、仏教、キリスト教ではなく、ただ一つ西欧で講究されてきた哲学のみであった、と彼はのちに語っている。これは明治初期の価値観の揺れ動いていたときに、自分の思想を模索し続けたあげく哲学へと到達した彼の歩みを示している。それは何ひとつ確かなもののない時代に、確かなものを求めて煩悶した青春の姿でもあった。

井上円了は明治維新の十年前に、真宗大谷派慈光寺（現在の新潟県長岡市浦）の長男として生

まれたが、世襲制の真宗教団では長男が住職を継ぐのが決まりであるため、彼も幼いころからそのための修練を積まされた。つねに数珠(じゆず)を手にかけていて、周囲の人々も寺の後継者として彼を扱った。しかし、江戸時代には国教化されて檀家制度の中で安定していた仏教も、明治政府が神道国教化政策をとって廃仏棄釈運動などによる弾圧を加えるようになる、その勢力は衰える一方となった。当時の世相を反映した狂歌に「要らぬもの 弓矢大小茶器の類 坊主山伏さてはお役者」(大小は刀のこと)と歌われるほどであった。彼はこのような状況の中で寺を継ぐ運命を背負っていたのだが、彼自身は一日も早く仏教の世界から脱出することを考えていた、と当時を回想している。もちろん実際に逃れることなど不可能に近いことであつた。当時の世相は幼いながらも彼の中に仏教に対する疑いを生じさせ、その後ほかの思想を求めていく端緒となつたのであろう。

彼は十歳から石黒忠憲(ただのり)のもとで漢学を学びはじめた。旧来の伝統的な教養である漢学は、いわば知識人の必須科目であつた。石黒はのちに陸軍の軍医総監になつた人で、西洋の学問にも通じていて、西洋風を好みとしていた。彼は井上円了ら塾生の成績がよいときには「西洋紙」を賞品として与えるなどして、西洋という新しい世界を紹介した。

井上円了はここで儒教の基礎を学んだが、同時に西洋世界との最初の触れ合いを自然にもつことができた。

井上円了が生まれた安政五年（一八五八年）には日米通商条約が結ばれた。これはその五年前に黒船でやってきたアメリカのペリーが突き付けた開国要求に応じたものだが、これをきっかけとして日本国内では徳川幕府を存続させようとする佐幕派と、幕府を倒して天皇を中心据えた新しい政治権力の樹立を目指す勤王派との対立が激化し、内乱へと発展し、ついに明治維新を迎えることになった。井上円了は、慶応四年（一八六八年）彼が十歳のとき北越戊辰戦争が起こり、生地である長岡藩が新政府軍に倒され、占領されるという形で維新を体験したが、このように旧体制が打破されて新体制が誕生する歴史の転換期を目の当たりにして、かなり強烈な印象を受けたであろう。明治維新後、日本の目は西欧先進諸国に向けられ、文明開化の名のもとに西洋の文化・学問・宗教などがつきつきに輸入された。時代の精神は日本在来の思想を古いものとして否定し、西洋から入ってくる新しい価値を追い求める方向へと動いていったのである。

井上円了は、漢学を修めたのち、十五歳から新しい学問である洋学、特に英語を学びは

じめたが、これも時代の流れに沿ったものであった。彼は明治七年さらに英語を学ぶために、新潟学校第一分校（旧長岡洋学校）に入学した。この学校は、維新で敗れた長岡藩が藩の立て直しのため教育に力を入れるという方針で設立したものであった。ここで彼はヤソ教すなわちキリスト教を知り、『バイブル』を英語訳と中国語訳を対照しながら読んだという。しかし、文明の宗教として脚光を浴びていたキリスト教ではあったが、そこにも彼の求めるものは見つからなかった。

真理は哲学にあり

ところで、京都にある東本願寺（真宗大谷派）は教団の次代を担う人材を養成する機関として教師教校を設置していたが、洋学校を卒業した井上円了は県知事の推薦によって英語のできる学生としてそこへ進むことになった。彼が教師教校に入った明治十年に東京大学が設立され、東本願寺はすぐに彼に国内留学生として東京大学入学を命じた。まもなく彼は上京し、翌年九月に東京大学予備門に入学した。当時の東京大学では英語で授業が行われていたため、まず予備門において英語を三年間学び、マスターしなければならなかった

のである。そして、おそらく予備門時代にいくらかなりとも哲学というものに触れることもあったに違いない。

明治十四年の東京大学文学部哲学科の新生は井上円了ただ一人であった。彼は井上哲次郎に東洋哲学を、原坦山にインド哲学を、フェノロサにカント、ヘーゲル、ミル、スペンサーの西洋哲学を学んだ。特に西洋哲学には興味を引かれ、そこにこそ彼が求めていたもの、すなわち真理があると考えた。

この時代、哲学はまだ新しい学問で、「哲学」という訳語自体、明治七年に西周がつくり出したばかりであった。しかし、その後、哲学界では単に西洋の哲学を輸入するだけでなく、東洋の哲学を探ろうという新しい動きが起こってきた。彼は生まれてから常に身近にあった仏教を、西洋の哲学を学んだ目で見直してみたとき、そこには数千年の歴史をもつ東洋の哲学があることを発見した。西洋哲学とは異なっているが、真理を追究するものであるという点では同じであった。今日では、彼は東洋哲学の分野で先駆的な役割を果たしたと評価されている。こうして彼は、洋の東西を問わず、真理は哲学にありという新たな確信に到達した。

哲学普及の必要性

在学中の井上円了は友人と哲学研究会をつくり、毎月会合してはカント、ヘーゲル、コントの研究討議を行い、明治十六年に「文学会」が組織されるとこれに参加し、さらに個人的にも哲学の研究活動を進めた。しかし、彼は文学会の活動にあきたらず、哲学を専門に研究する学会の設立を考え、友人の三宅雄二郎、棚橋一郎とともに計画を練った。三宅は哲学科、棚橋は和漢文学科と、ともに大学の先輩であった。彼らは西周らに相談し、意見を聞いた。そして明治十七年に「哲学会」を発足させた。これによって文学会は二分され、もう一方は「国家学会」となった。

哲学会設立の中心メンバーは彼ら三人のほか井上哲次郎、有賀長雄で構成され、東京神田錦町の学習院内に本部を置いていた。第一回の会合には、西周をはじめ加藤弘之、中村正直、西村茂樹、外山正一ら、日本に哲学を導入し発展させた人々が出席した。

明治二十年に学会誌『哲学会雑誌』（のち「哲学雑誌」と改題）を創刊したが、この巻頭で井上円了は「哲学ノ必要ヲ論シテ本会ノ沿革ニ及フ」という論文を発表し、彼の哲学に対す

る認識や哲学会設立の目的を示している。彼は哲学の本質について「それ哲学は通常理論と応用との二科に分つも、要するに理論の学にして、思想の法則事物の原理を究明する学なり。ゆえに思想の及ぶところ事物の存するところ、一として哲学に關せざるはなし」と書いている。

そして、つぎの三点を強調している。第一に、哲学が諸学の基礎であること。第二に、哲学を研究・普及させることが国家の文明を發展させるためには不可欠であること。第三に、西洋哲学の研究に加えて東洋哲学の研究が必要であり、哲学の研究は究極的には日本の文明開化を進め、富強を助けるものであるとしている。

哲学会の設立は、哲学を重視した井上円了が、その普及のために行動した一例であるが、彼は同様の意図で盛んに著述活動もした。学生時代から雑誌に論文などを発表していたが、特に「耶蘇教を排するは理論にあるか」(のち「真理金針」として単行本となる)や「哲学要領」などは彼の代表的著作に数えられている。また、井上円了の『哲学一夕話』『仏教活論序論』によって、哲学への目を開かれた人が非常に多かったという。

教育事業を目指して

井上円了は明治十八年二十七歳に、東京大学を卒業し、文学士となった。卒業論文は中国の哲学者を扱った『読荀子』であった。卒業後しばらくの間は、明治五年に中村正直が設立し、福沢諭吉の慶応義塾と並び称されていた同人社や成立学舎などで教員をつとめた。

当時の東京大学卒業生の進路をみると、文学部では大学の教官か行政官僚になるのが通常のコースだったようである。これは文部省が東京大学を国家の大学として、官僚養成機関という位置づけをしていたためである。当然、井上円了にも同じ道が用意されていた。彼に漢学を教えた石黒忠憲は、このとき陸軍軍医監となっていたが、彼の就職に関して森有礼文部大臣に、文部省へ抜擢採用してほしいと話した。森はすぐに承諾して採用しようとしたが、彼はつぎのようにいって、これを断っている。

「おほしめしは誠にありがたいのですが、もとより私は本願寺の宗費生として大学に行ったのですから、官途に就くのは忍びないことです。それに私は日ごろの誓願として、将来は宗教的教育の事業に従事して、大いに世道人心のために尽瘁してみたいと思っています

すので……」

官僚への道を断った彼には、もう一つ、本願寺に戻らなければならないという道があった。彼の在学中の保証人であった南条文雄は、東本願寺執事渥美契縁を訪ねて、井上円了が仏教各宗中はじめての学士であることを考慮して、本願寺として優遇措置を講ずるよう要請した。教団は彼に教師教校の教授を命じるが、彼は、近代化が遅れ勢力が衰退している仏教の力を回復するには、俗人となって活動するほうが有効なこと、また学校設立の意志があることを理由に、命令を固辞した。教団との交渉は再三再四にわたり、とりあえず「印度哲学取調掛」に任命されているが、彼の意志は堅く、変わることがなかった。やがて彼が哲学館を創立するに至って、本願寺はようやく彼の意図を理解し、民間人として活動することを認めた。

この二つの道を断ったときの理由からも明らかのように、井上円了は卒業以前からすでに、教育事業に携わるといふ将来の方向を定めていた。むろん、そこには哲学の普及という大きな目的があったことはいふまでもない。

日本社会の改良

明治十九年の春、井上円了は病氣療養中の熱海で哲学館設立の計画を練っているが、ここでは哲学館設立にも影響を与えた当時の社会状況と井上円了らの思想運動について触れておこう。

この年の秋、彼は哲学会の同志である棚橋一郎と相談して、哲学書などを中心にした出版社の設立を計画した。これが明治二十年一月にできた哲学書院で、『哲学会雑誌』は二月にここから創刊されたのである。以後、十三年にわたって、彼の著作はもとより、多くの出版物が世に送り出されていった。

しかし、哲学書院は単なる出版社というだけにとどまらなかった。『東洋大学八十年史』には「哲学書院が他面において、同志の良き集会場となり、井上円了が関係したあらゆる文化事業や、思想運動の策源地になった」とある。すなわち、ここで彼のさまざまな活動が結合していったのである。なかでも明治二十年代の思想界をリードした「政教社」の結成は大きな意味を持っていた。

明治二十年五月、例によって哲学書院の二階に集まった人々がいる。棚橋と三宅のほか辰巳小次郎、加賀秀一という顔ぶれだった。棚橋が「どうもこう外国かぶれが盛んになってしまつて、なんとかこれをたたき直さなければならんのじゃないか」といったところ、一同が賛成したので、さらに賛同者を募つて政教社という団体を結成することになった。棚橋が提起した問題を、井上円了はつぎのように語っている。

「明治維新後、日本固有の学問はもちろん、衣食住日常のことに至るまですべて西洋をとらねばならぬようになってきて、一も西洋、二も西洋、三も西洋というありさまであった。それで第一に仏教を排し、ついで漢学を排し、味噌や豆腐に至るまで排斥された時代があった。これは社会の潮流が極端から極端へ走つたためである。

西洋崇拜の必然の結果として、宗教も日本従来のを捨てて、西洋に行われているのをとらねばならぬという世論を見るに至つた。これがその当時ヤソ教が蔓延した理由である。婦人のごときもすべて西洋風に育て、舞踏までも教えなければならぬように考えられた」

このような風潮は「欧化主義」といわれ、その典型は政府による鹿鳴館外交であつたが、

これは西洋的スタイルをまねることが不平等条約の改正に必要であるという考えから出たことであつた。そこで政教社の人々は、欧化主義に対して、ナシヨナリティを訳した「国粹主義」あるいは「日本主義」をスローガンとし、日本固有の宗教、教育、美術、政治、生産制度などの長所を保存することを主張した。すなわち、日本人としての主体性を回復しようということである。

政教社に集まつた人々は、哲学館系と東京英語学校系とに分けられる。前者は井上円了、三宅雪嶺（雄二郎）、加賀秀一、島地黙雷、辰巳小次郎、棚橋一郎と、ほとんどが東京大学出身者で、後者は志賀重昂、松下丈吉、菊地熊太郎という顔ぶれで、札幌農学校出身者である。いずれも官僚とならず、あるいは官僚をやめて自主独立の道を歩んだ人であつた。彼らの活動は明治二十一年四月から発行された雑誌『日本人』を中心に行われたが、その主張は明治中期の思想界を二分するほど大きな運動として普及した。その理由としては、彼ら自身が西洋の近代的知識を身につけていたことや、民衆の側に立った運動であつたことなどが考えられる。

哲学館創立は明治二十年九月であるから、政教社の誕生とほぼ前後していることになる。

「日本主義」という新しい思想運動と井上円了の思想が結び付いて、哲学館には、日本社会の改良という役割もまた加えられたのである。

② 哲学館の開設

二つのグループ

井上円了は、東京大学を卒業した翌年の春、病氣療養中の熱海で加賀秀一に、大学時代から抱いていた学校設立の願いをはじめて具体的な構想として明かし、その後棚橋一郎、三宅雄二郎、内田周平にも話した。棚橋によると、彼は哲学館においては哲学の普及を目的とすることを説明したうえで、さらに「僧侶が地獄極楽ということにこだわっていて、本当の僧侶学をやっていない。彼らに哲学思想を与えてやれば、きっと社会の利益につながると思う」と語ったということで、哲学を用いて沈滞していた仏教界を活性化することも願っていたことがわかる。

百年後の今日では、創立時の経過を明らかにする資料はほとんど残っていない。しかし、当時の関係者の発言や断片的記録を総合してみると、哲学館の創立には、井上円了を中心に二つのグループが関係していたことがわかる。一つはすでに述べたように哲学会のメンバーを含む東京大学の出身者たちであり、もう一つは東本願寺の国内留学生たちであった。東本願寺は、井上円了を留学させた後も清沢満之や柳祐信ら四、五名の学生を国内留学させたが、その際「すべてのことは井上円了を手本とし、相談せよ」と命じていた。資料によれば、井上円了を中心とする彼らは学生時代から新しい宗教関係の学校を設立する希望を持っていたらしく、それが哲学館という形で具体化されたともいわれている。

井上円了の哲学館設立の構想はこの二つのグループの協力を得て実現されたのである。

開設ノ旨趣

井上円了は哲学書院の設立や政教社の結成を進めながら、協力者たちとともに、構想をより明確な形に整えていった。そして、明治二十年六月に発表された「哲学館開設ノ旨趣」と題する趣意書によって、哲学館は世に姿を現した。その内容は、まず哲学の意味と重要

性を述べ、哲学館創立の目的に及んでゐるが、これを要約するとつぎのようになる。

「文明の發達は主として知力の發達によつてゐる。知力の發達を促すものは教育という方法であり、高等な知力を得るためにはそれに相応する學問を用いなければならない。その學問とは哲学である。哲学は万物の原理を探り、その原則を定める學問で、いわば法律・政治から理学・工芸にいたるすべての學問世界の中央政府にして、万學を統括する學問である。しかし、哲學を専門に教授してゐるのは帝國大學だけであり、翻譯書が多く出ているとはいつても、それを読んだだけで原文の眞意を理解することはむずかしい。そこで、それぞれの分野の學士と相談して、哲學專修の一館を創立し、これを哲學館と稱することにする。ここでは大學の課程に進むだけの資力のない人（余資なき者）ならびに原書を読みこなせるようになるだけの時間的余裕のない人（優暇なき者）のために哲學を速く學べるようにし、一年ないしは三年で論理学、心理学、倫理学、審美学、社会学、宗敎学、教育学、哲学、東洋諸学などを教授する。哲學館の教育が成功すれば、社会、國家に利益をもたらすし、文明進歩の一大補助となるであろう」

この文章は設立の協力を求めるために、知人や著名人に送られるとともに、雑誌にも掲

載され、彼の意図を広く一般に訴える役割を果たした。

多くの後援者

哲学館創立において忘れてならないのは、賛同者・後援者の存在であるが、それについて井上円了はこういつている。

「はじめ哲学館を創立したときには、もとより無資本で、またほかから扶助保護を受けることもなく、すべて有志の寄付によって創立費をまかさないました。当時本館の旨趣に賛成して多少の寄付をしてくれた人は二百八十人ありました。したがって、哲学館は二百八十人で設立したものと行ってよいわけです」

哲学館の経済的基盤は、一部の有力者に頼るのではなく、多くの人から寄せられたわずかずつの寄付金によってつくられたのである。

そういう人々の中に加藤弘之と寺田福寿の名がある。加藤弘之は日本にはじめて立憲思想を紹介した人で、進化論を中心にした政治哲学を展開し、また明治十四年に東京大学初代総理となった。哲学館創立にあたっては顧問となり、以後哲学館の発展を見守り続けた。

寺田福寿は真宗大谷派の僧侶で、本願寺の東京留学生として慶応義塾に学び、難解な仏教を大衆にいかにも理解させるかを研究し、宗派を超えた活動を行っていた。駒込の真浄寺の住職だったが、ことあるごとに哲学館のために寺を開放して、協力を惜しまなかった。井上円了は、のちに出会って大きな援助を受けた勝海舟を含めて、彼らを「哲学館の三恩人」と呼んだ。

高等教育のはじまり

「哲学館開設ノ旨趣」において、井上円了が哲学館の教育対象としたのは、「余資なき者、優暇なき者」と表現されているように、大学へ行ったり外国語を学んだりする余裕のない人々であった。この意味を理解するためには、当時の高等教育制度について触れなければならない。

日本の近代教育は明治維新からはじまるが、それ以前にも一般民衆の中には教育に対して関心を持っている人も多く、寺子屋、家塾、私塾などで盛んに教育が行われていた。しかし、これらは歴史の中で自然に発達したもので、もちろん義務教育ではなかった。ヨ―

ロツパ的な近代教育制度が導入されたのは、明治五年に公布された「学制」が最初であった。これは小学校を人口六百人につき一校、中学校を人口十三万人につき一校、大学を全国に八校設置するという内容であったが、維新政府の財政基盤が弱かったため、このまま実施することは不可能であった。

しかし、翌年、政府は「学制二編追加」という規定を設けて、高等教育機関である大学について具体化の方向を打ち出した。この規定によって「専門学校」が設置されたが、これは日本の近代化に必要な「百般の工芸技術および天文窮理医療法律経済等」を外国人の教師により洋語で教授する学校であった。なぜ大学という名称を用いず区別したのかというと、政府が学制において示した「大学」とは、日本人が日本語で教育する学校で、なおかつ総合大学を意味していたからである。そして、この専門学校の目的は、将来そのような大学を設立するために、西洋の学術・技芸を日本語で教授することのできる日本人の教師を養成することであった。日本の高等教育は外国人の「お雇い教師」によってはじめられ、その授業は英語やドイツ語で行われたため、学生は「日本人にして西洋人」の生活を送っているとまで形容された。

こうしていくつかの専門学校が設立された。これらのうち開成学校と東京医学校とは明治十年に統合され、日本最初の大学である「東京大学」が誕生した。これは開成学校の総理だった加藤弘之の提案によるもので、文学部、理学部、法学部、医学部からなっていたものの、授業は依然として外国語で行われていたため、実質的には学制で示された大学とは異なっていた。そして、東京大学で学ぶためには、まず「予備門」において四年間語学を学ばなければならず、結局大学卒業までには八年もかかるという状態であった。

この予備門から大学へという基本的な形は、哲学館創立のころにもまったく変わっておらず、依然として大学で学ぶのは非常にむずかしいことだった。井上円了の「余資なき者、優暇なき者」とは、いわば学習意欲を持ちながら、経済その他の条件で、このコースに乗れない人々であったといえる。

官学中心主義

東京大学文学部には当初、第一科として史学、哲学および政治学科、第二科として和漢文学科が設置されていた。まもなく学科の分化独立が進められ、哲学科は井上円了の入学

した明治十四年に独立した。ちなみに、この段階ではまだ十分に科目が定まっておらず、『東京大学百年史』によると、このとき大学は文部省に哲学科の授業内容について照会しているが、その回答では哲学（当時は純正哲学と呼んでいた）だけでなく、心理学、道義学、論理学を含み、哲学についてはその概要程度のレベルで教授することとなっていた。

井上円了は当時の哲学科についてこう語っている。

「私が大学にいたころは、哲学科の学生は私一人で、教師が十何人とありました。それです。私が欠席すると十何人の教師がみな休まなければならぬというので、各教師からは、君が休むときは前もって案内をしておいてくれ」といわれました」

これでわかるように、東京大学では多数の教師のもとで少数の学生が教育されていた。これは東京大学が、国家の近代化に役立つ専門家を一日も早く養成するための機関と考えられていたからである。

政府は東京大学のこの性格をより明確にするために、明治十九年に「帝国大学令」を公布し、東京大学を帝国大学と改めた。この法律の特色は、一般的な「大学」に関するものではなく、ただ帝国大学についてのみ定めたところにあった。ここで政府は、帝国大学の

目的を、「国家の須要に應ずる學術技芸を教授しおよびその蘊奥（うんのう）を攻究する」こと、つまり国家になくはならない人材を養成し、その研究を發展させることに置き、国家のための学校であることをはっきりと規定した。

帝国大学は、国家の手によってつくられたエリート養成機関で、政府からいろいろな優遇措置を受けていた。卒業生には医師、弁護士、中等教員、高等教員ほか、さまざまな職業の資格や免許が、卒業と同時に無試験で与えられた。例えば、明治二十年から高等文官試験制度がはじまったが、帝国大学法科大学（現在の法学部）卒業生はこの試験を受けなくても高級官僚の地位が保証されていた。

帝国大学令で打ち出された高等教育における官学中心主義の政策は、その後の高等教育の發達を根本的に規定し、官学と私学という格差のある二重構造を生み、現在にまで影響を及ぼしている。

私立学校の誕生

「哲学館開設ノ旨趣」の發表からひと月あまりたった明治二十年七月二十二日、井上円

了は「私立学校設置願」を東京府知事に提出した。教員は彼と清沢満之であった。そして、三日後には設立認可を受けた。

当時はただ届け出をするだけで、どのような種類の学校であっても自由に設立することが可能であった。官学中心主義の教育政策をとっていた政府は、私立学校を高等教育機関としては認めず、制度に組み入れることもしなかったからである。したがって私立学校を設立することは自由であったが、国からの援助はもとより、帝国大学に与えられたような優遇措置もいっさいなかった。しかし、制度に組み込まれないという点を裏返してみれば、国からの制約を受けないということであり、創立者はそれぞれの教育理念に基づいて自由な学校づくりができたのである。そのため明治初期から多くの私立学校が、それぞれ独自の建学の精神を掲げて誕生していた。

表1は、明治期に設立された私立学校で、戦後の新制大学まで続いている二十五校を、設立年順に並べたものである。これによると、日本の近代教育の創始期である明治十年代に続々と学校が誕生しているが、特に「五大法律学校」と称される専修大学、法政大学、明治大学、早稲田大学、中央大学がこの時期に創立されていて、それらは法律家の養成と

表1 旧制大学から新制大学まで続いた25の私立大学

設立年	設立時校名	現在名
安政5年	蘭学塾	慶応義塾大学
明治5年	宗教院	立正大学
明治7年	立教学校(英語学校)	立教大学
明治8年	曹洞宗専門学校	駒沢大学
	同志社英学校	同志社大学
明治12年	大教校(浄土真宗本願寺派)	龍谷大学
明治13年	専修学校	専修大学
	東京法学社	法政大学
明治14年	明治法律学校	明治大学
	成医会講習所	東京慈恵会医科大学
明治15年	真宗大学寮	大谷大学
	皇典講究所	国学院大学
	東京専門学校	早稲田大学
明治18年	英吉利法律学校	中央大学
明治19年	真言宗古義大学林	高野山大学
	関西法律学校	関西大学
明治20年	哲学館	東洋大学
明治22年	日本法律学校	日本大学
	関西学院	関西学院大学
明治24年	育英黌農業科	東京農業大学
明治33年	台湾協会学校	拓殖大学
	京都法政学校	立命館大学
明治37年	日本医学校	日本医科大学
明治44年	上智学院	上智大学
大正15年	天台宗大学・豊山大学・宗教大学	大正大学

表2 設置者別学校数・学生数（明治21年）

区 分	大 学（旧制）		専門学校（旧制）	
	学校数	学生数	学校数	学生数
国 立	1	738	4	439
公 立	—	—	5	1,107
私 立	—	—	34	7,736
計	1	738	43	9,282

出典：文部省『学制百年史（資料編）』昭和47年

いう帝国大学の役割を補完する形でつくられた点に特色があった。しかし、私立学校は民間の立場から高等教育を行おうというものであり、政府がその存在を正当に評価していかなかったにもかかわらず、その社会的役割は増大していった。

表2は、哲学館設立の翌年、明治二十一年における高等教育機関の学校数と学生数を示したものである。大学は帝国大学一校だけで、官立の専門学校は九校だが、これに対して私立学校は三十四校にもほっている。また、学生数の点でも私立学校が七十七%以上を占めており、その高等教育における割合がいかに大きくなっていったかが明らかである。

これら私立学校を教育内容別にみると、実用的な学問を教授する学校と、キリスト教、仏教、神道などの宗教

を中心とした学校とに分けられ、前者はさらに①法学・経済などの社会科学系、②英学など語学中心の人文科学系、③医学・物理学などの自然科学系に分類できる。このことからわかるように、哲学という分野を専門とする学校はこのいずれにも入らず、その意味では哲学館は極めてユニークな学校であった。

哲学館の開館式

哲学館は、はじめは独立した校舎を持たず、東京大学の近くの本郷区龍岡町（現在の文京区湯島）にある臨済宗妙心寺派麟祥院という寺の一室を借りて教室としていた。開館式は明治二十年九月十六日、この寺の境内で行われた。

式は午後一時ごろからはじまり、来賓および生徒一同を前に、まず館主井上円了が開館の趣旨を述べ、ついで帝国大学文科大学長外山正一が「哲学の普及」という祝辞を呈した。さらに棚橋一郎が「哲学の要」、辰巳小次郎が「哲学の世間に及ぼす効用」と題して演説をした。来賓は帝国大学の学士と仏教各宗の学僧が多かったという。式の模様は当時の『東京日日新聞』や『郵便報知新聞』などで報道された。

歌人であり、また和歌の研究者として今日でも広く知られている佐佐木信綱は、この式典に哲学館の第一期生として参列していた。彼は井上円了の『哲学一夕話』などによって哲学に対する興味をかきたてられ、帝国大学の古典科と国民英学会に学ぶかたわら、哲学館にも通うことにしたのである。彼は「開校当日、麟祥院へ行ってみると、本堂にだいたいたくさんの方がおりました。自分の第一印象としては、自分と同じく哲学を知ろうとあこがれている人がこのように多いのだろうか、驚くとともに喜びました」と、そのときの感想を記している。

哲学を学ぶこと

井上円了が開館式で行った演説は、「哲学館開設ノ旨趣」の内容をさらに発展させたもので、哲学館の目的を詳しく述べている。

彼は、哲学館における教育の対象者を、つぎの三点にまとめている。

- 第一 晩学にして速成を求める者
- 第二 貧困にして大学に入ることが不可能な者

第三 原書に通ぜずして洋語を理解できない者

そして、哲学館はこれらの人々に哲学を教授するが、その目的は哲学者の養成ではなく、哲学を学ぶことにあるとしている。哲学は諸学の基礎となるものであるから、社会に出て一つのことを達成しようとする人は、哲学諸科を心得ているべきであり、また教育家や宗教家になる人が学べば、専門の学問の理解を助けることにもなる。哲学館は、このように活用範囲の広い哲学を日本語で教え、速成するための学校だといっている。ここで彼が考えていたのは、哲学館は彼自身が学んだ東京大学の哲学科をモデルとして、その速成科たるべきことであつた。

さらに、哲学館には学問上においても大きな役割があると、彼はいつている。まず、哲学は西洋諸学の関係を知るのに便利であること。そして、哲学を学ぶことによって、東洋の学問、特に東洋哲学の空想的で憶断にたよるといふ欠点を補い、その活性化をはかること。そのためには、西洋哲学と東洋哲学を同時に学ばなければならず、哲学館のような学校が必要となるのである。

彼は、開館した哲学館が「仮教場」であり、いずれ校舎を建設して、「哲学館の独立」

をはかるつもりであると述べて、演説を締めくくっている。

哲学館の必要性

では、哲学館の誕生にはどのような期待が寄せられていたのだろうか。外山正一は祝辞の中で、哲学と哲学館の必要性について、つぎのようなことをいつている。

「高等教育機関は帝国大学だけが、これは修学の年限が長く、学費もたくさん必要である。現在、学問をしたいと願う人々が多いという『世の需要』にもかかわらず、学校は不足しているので、『専門学校』が必要になってくる。そもそも一国の文明を開くということは、一人二人の知識人がいるだけでは達成できず、やはり一般人民が知識に富むようにならなければならない。そのために法律・医学・政治・経済などの速成学校（専門学校）が多くできるようになったが、哲学の学校というのはなかった。哲学館はその欠点を補う意味がある。世間には哲学思想をあまり重視しない人もいるが、歴史を書く、宗教を論じる、美術の改良を論じる、人倫を研究する、さらに国の隆盛をはかるにしても、哲学上の思想によらずにできるものはない」

すでに述べたように、帝国大学（東京大学）に入るには、まず予備門で語学を学ばねばならなかったので、大学卒業までには七年もかかった。これでは近代化に必要な人材の養成や学問・知識の普及は望めない。

これに対して私立学校は、速成主義をとり、授業も日本語で行っていた。東京専門学校（早稲田大学）の創立者の一人である小野梓は、明治十五年の開校式で、同校は速成を期し、日本語で教授するところで、これによって学問の独立、大学の設立へと進むであろうと演説している。これは当時の私立学校の創立者たちに共通の考え方であり、井上円了もこれと同じ立場に立っていた。

若い教員

こうして哲学館はスタートしたが、井上円了の理念の実現を支えたのは、教員たちであった。開設当初の講師・評議員（表3）には、創立までの協力者が多いが、特徴は二つある。第一点は、講師十八人のうち十二人が東京大学の卒業生であること。第二点は、年齢が若いことで、館主井上円了は二十九歳で、教員のほとんどは二十代と三十代であった。最高

表3 創立時の講師および評議員（年齢順）

氏名	年齢	学歴	担当科目	関係事項
井上 円了	29	東大卒	心理学、 哲学論	教育者、哲学者、哲 学館創立者
岡本 監輔	48		儒学	東大予備門講師
村上 专精	36	高倉学寮	仏教学	仏教史学者、東大講 師
清野 勉	34		論理学	哲学者、創立以来論 理学を教授
内田 周平	33	東大卒	儒学	中国哲学者、美学、 儒学を教授
国府寺 新作	32	東大卒	教育学	高等師範学校教授、 外交官
松本 愛重	30	東大卒	国文学	文学博士
松本源太郎	30	東大卒	心理学	教育家
嘉納治五郎	27	東大卒	倫理学	教育家、講道館柔道 の創始者
織田 得能	27	高倉学寮	仏教史	仏教学者、真宗大谷 派僧侶
辰巳小次郎	27	東大卒	社会学	東大予備門教諭
三宅雄二郎	27	東大卒	哲学史	哲学者、評論家
清沢 満之	24	東大卒	心理学、 哲学史	哲学者、僧侶、東本 願寺の改革運動をお こす、評議員
棚橋 一郎	24	東大卒	倫理学	教育家、郁文館中学 を設立
岡田 良平	23	東大卒		官僚、政治家、東洋 大学第5代学長、評 議員
日高 真実	22	東大卒	論文校閲	教育者、東大在学中
加賀 秀一	22	東大卒		教育者、学習院教授、 評議員
磯江 潤	21	応報義塾	英学初歩	教育者、幹事兼講師、 京華学園を創立
坂倉銀之助		東大卒	論理学	哲学者、鹿児島高等 中学造土館教授
柳 祐信			英学初歩	東本願寺留学生、評 議員

齡者の岡本監輔は、井上円了が予備門で教えを受けた人だが、それでも四十八歳である。また村上専精は仏教学の講師を勤めながら、同時に一学生として西洋哲学を学んでいた。明治は「早熟の時代」だったともいわれるが、創立したばかりの哲学館の推進力となっていたのは、彼らのみずみずしい知性とあふれる情熱であった。

さまざまな学生

創立当初は入学試験はなく、十六歳以上の男子が対象というだけで、特別な制限はなかった。したがって、学生は十七、八歳の青年から四、五十歳の中年までと幅広く、中には「子持ち」や「孫持ち」の学生もいたということである。定員は、はじめは五十名とされていたが、入学希望者が多かったため、さらに追加して入学させている。

十九歳で哲学館に入り、のち第四代学長となった境野哲は、当時の印象をこう記している。

「学校とは名前のみで、徳川時代の寺子屋式であって、湯島の寺の一室を借りて校舎にあてていた。通学する学生の服装は一定ではなく、洋服あり、破ればかまあり、あるいは

金らんの袈裟（けさ）に数珠（じゆず）という人もあった。いまから考えれば、一種の仮装行列ともいうべきありさまであった」

また、学力の差は人によって大きく違っていて、専門的知識を持った人もいれば、まったく白紙の状態の人もいた。ほとんどの学生は英語はもちろん知らないし、心理学や倫理学など聞いたこともないというような状態だったのである。

はじめはこのような館内員つまり通学生だけであったが、今日でいう通信教育に着手し、翌二十一年に講義録を発行し、一月には館外員制度を設けた。館外員になるには資格は必要なかった。これは、地方で学ぼうという人々に便宜をはかるために、教室での講義をそのまま筆記印刷した講義録を発行したもので、哲学の普及という目的に沿ったものであった。講義録は毎月三回発行され、多くの人々によって哲学が学ばれた。

学生の一人であった河口慧海は、鎖国状態にあったネパールやチベットに入って仏教原典を持ち帰ったことで知られる仏教学者で探検家であるが、哲学館が創立されたときは二十二歳で、はじめは学資がないので館外員として講義録を読んでいた。そのうち苦学を決心して上京し、館内員となった。しかし、実際の生活はそうとうに厳しく、「茶漬沢庵の

下宿で、一か月金二円、学校の月謝と校費で一円十銭、残金九十銭が雑費である」と記しているが、この四円を得るためにアルバイトに励み、疲労とたたかいながら勉強をしたのである。哲学を学ぼうという熱意は当時の学生に共通したものであった。

授業風景

当時は九月から翌年七月までが学年の区切りになっていて、一日の授業時間は午後一時から五時までだった。畳敷きの教室では、どのような授業が行われていたのであろうか。

哲学館ではテキストに翻訳本を使わず、教室で教師が原書を訳しながら授業をしていた。まだしきりに訳語をつくり出している時代だったので、翻訳本は読みにくく、かえってむしろかしいこともあったからである。しかし、この方法にも問題がなかったわけではない。ときには教師が適当な日本語を思いつくことができなくて苦しむため、聴いている学生はよけいにわからなくなることもあったようである。「授業時間が一時間であれば、質問時間は三十分必要であった」と、学生の一人は記している。ついには矢のような質問で教師に迫る「質問博士」とか、逆に教師に対して堂々と説明してみせる「説明博士」などと呼

ばれる学生も現れたということである。

また、ある講義では、むずかしいカントの哲学を一番はじめに教えたとか、学生に「客観とはどういう字ですか」と日本語を尋ねられた教師が「それはオブジェクトです」と英語で答えたという、笑い話のようなエピソードも残っている。

初期の授業は教師と学生の間に混乱があり、不完全なものであったが、どちらも情熱にあふれていたのも、実に活気に満ちていた。また、学問に対する態度は真剣で、自由な研究という点では非常に優れたものがあつた。

③ 哲学館の改良

海外視察旅行

明治時代には、政府でも民間でも、西洋先進諸国の知見・知識を学ぶための視察外遊が盛んに行われていた。私立学校の創立者にも外遊や留学の経験を持つ人は少なくない。慶

応義塾の福沢諭吉はアメリカとヨーロッパ、同志社の新島襄はアメリカ、早稲田の小野梓は中国とイギリス、明治の岸本辰雄はフランスと、それぞれの国で学んでいた。

井上円了は生涯に三度の海外旅行を経験しているが、その範囲は全世界に及んでいる（表4）。また、中国、朝鮮などに講演旅行をしている。第一回の外遊は哲学館開設の翌年、明治二十一年（一八八八年）六月から一年間にわたって行われ、目的は欧米の政教関係および東洋学の研究状況を視察・調査することであった。

この外遊は、彼にとって、書籍などで伝えられていた欧米諸国の「列強」の現実を肌で感じ、日本と西洋の関係を相対的に見直す機会であり、また、それまでに学習した知識を確認し、探究した思想を検討するという意味もあった。彼は外遊によって得られた見聞や深められた確信によって、哲学館の教育と日本の現実の改革とを関連づけ、その教育構想を練りあげていった。

外遊の経過

六月九日、留守中の哲学館を棚橋一郎に託した井上円了は、イギリスの船に乗って、横

表4 井上円了の海外旅行

3	2	1	
オーストラリア・北歐・南アメリカ大陸等の視察旅行	インド聖跡参拝、欧米の大学教育・経営、社会教育の視察	欧米の政教関係・東洋学の研究状況の視察	目的
明治44・4・1 9か月	明治35・11・15 8か月	明治21・6・9 1年間	出発日・期間
53歳	44歳	30歳	年齢
オーストラリア、イギリス、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、スイス、フランス、スペイン、ポルトガル、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、ペルー、メキシコ	インド、イギリス、ウエールズ、スコットランド、アイルランド、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、アメリカ、カナダ	アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリア、エジプト、イエメン	旅行先(訪問順)

浜を出発した。このとき、三十歳であった。太平洋横断には半月かかり、二十四日にサンフランシスコに到着、さらに誕生から二十年目を迎えた大陸横断鉄道に乗ってアメリカ大陸を横切り、ニューヨークからロンドンへ大西洋を渡った。

それから三か月間、スコットランドやイギリス南部を回った。この間に、オックスフォード大学ではヨーロッパではじめて仏哲学の研究を確立したサンスクリット学者のマックス・ミュラーに会い、ケンブリッジ大学ではカワー（インド学者）、ウエード（中国研究者）、シーレー（歴史学者）といった人々と東洋哲学について話し合った。また大英博物館を見学したり、アジア協会でインド哲学の現況を尋ねたりした。

十二月下旬に、ロンドンからパリに渡った。パリにはちょうど西本願寺僧侶藤島了穂が、哲学研究のために留学していた。藤島は『日本仏教史』を著して仏教哲学を欧米の学者に紹介した人物である。井上円了は藤島の隣に宿をとり、日本に哲学を普及させることや、帰国後の哲学館の事業について語り合った。

パリからローマ、ウィーンを経て、ベルリンへ行った。このころ、明治十七年から留学していた井上哲次郎はベルリン大学で哲学を研究しながら、付属の東洋学校で教鞭をとつ

ていた。藤島もベルリンにやってきて、三人は今後の哲学普及の方法を語り合い、またハルトマンという哲学者を訪ねたという。その後、ベルギーを経てパリに戻り、世界万国博覧会を見学した。一八八九年のパリ万博といえ、エッフェル塔が建設されたことで有名である。

帰路は、マルセイユから船に乗り、エジプト、アラビア、インド、中国を経由して、明治二十二年六月二十八日、横浜に到着した。出発からまる一年後のことであった。

外遊の結論

帰国後、井上円了は『欧米各国政教日記』上下二編を発表した。訪問地で見聞した事柄が、宗教、風俗、習慣を中心に、二百九十一のテーマに分けられ、客観的に記述されている。

例えば、「食事の礼拝」の項において、宗教的慣習を日本と比較して、「英国にて宗教信者の家を見るに内仏神棚のごときものはさらに安置せず。ゆえに朝夕礼拝を行うことなし。ただ国教宗の家にては誦すべき文句あり。これを晩食のとき食卓に対して口誦するを例と

する」と記しているが、キリスト教の食前の感謝の祈りも、彼には興味深いものと映つたのであろう。

この外遊の目的の一つは、政治と宗教の關係を視察することであつた。特に井上円了は欧米におけるキリスト教の状況には関心が深かつた。というのは、日本では「内地雜居問題」が起こつていたからである。内地雜居問題というのは、欧米諸国との不平等条約改正に絡んだもので、欧米は居留地廢止、治外法權撤廢に應じるかわりに、外国人の内地雜居（日本国内の居住、旅行、營業等の自由を認めるよう要求してゐた。仏教界にとつても、内地雜居が行われれば、キリスト教が国内で自由に布教できることになるため、重要な問題であつた。この問題は明治初期から論じられていたが、井上円了が外遊から帰国する直前の明治二十二年五月、大隈重信の条約改正案に内地雜居を認める条項が含まれてゐることが明らかとなり、大きな反対運動が起こつてゐた（条約が改正され、内地雜居が實施されたのは明治三十二年）。井上円了はキリスト教に関するつぎのような書簡を『哲学会雜誌』に送つてゐる。

「ヤソ教の盛衰に關しては、小生の英米旅行の際、もつともその觀察に注意したるところなるが、米國まず依然として盛んなるように見うけたれども、英國は外面のみ昔時の勢

力を示し、内部は余程衰えたるように相見え候。しかして、(欧州)大陸は外面まで衰微の徴候を現じたること、一目して人の知るところにござ候」

これは自分だけの考えではなくて、欧米周遊の人や現地に住んでいる人の見解でもあるとつけ加えている。

また、もう一つの目的は、欧米における東洋学の状況視察であったが、これについては『欧米各国政教日記』の「東洋学校」の項で述べている。

「西洋諸国にて東洋学を研究するに至りしはこの第十九世紀のことにして、諸国に東洋学校の設立あるに至りしはきわめて近年のことなり。ドイツ、フランス、オーストリアは各東洋学校を設立し、独仏両国の東洋学校には日本学の部あり。英国の大学中にはサンスクリットおよびシナ学の教授あり。サンスクリットおよびシナ学はイタリアおよびロシアにても講究するなり。西洋にて東洋学を研究することかくのごとく盛んなるに、日本は自国の諸学を捨てて、ひとり西洋学を用うるははなはだ怪しまざるべからず」

無批判に西洋のものを取り入れる日本の欧化主義に疑問を投げかけている。彼はさらにこの外遊から、欧米諸国の富と力を支えているものに気がついた。それはどの国の人民も

みな「独立の精神」を持つているということであつた。つまり、学問、事業、組織、風習、宗教などに、アメリカにはアメリカ風の、イギリスにはイギリス風の固有なものであるということである。

これに対して、日本は欧米のものを取り入れ、日本固有のものを捨てる傾向がある。彼は、日本の独立を維持するためには、こうした傾向を変えて、日本固有の言語、宗教、歴史、およびその他日本固有の風俗習慣を改良保存しなければならないという結論に達した。

哲学館の新校舎

帰国した井上円了はこのような考えをいかし、哲学館の改良、大学設立の計画をもって、校舎の建築にとりかかった。この建築は、彼が明治二十年の開館式の演説において「哲学館の独立」として述べていたことである。

哲学館は開館一年後には、学生数の増加に伴つて麟祥院境内に校舎として一棟を借りていたが、国会開設前夜ともいふべきこのころは社会情勢が不安定だったことなどから、学生数はやや減少傾向にあつたものの館内員二百余名、館外員も九百名以上になつており、

そこも手狭な状態になっていた。そこで、場所も本郷区駒込蓬萊町（現在の文京区向丘）に移転し、独立した校舎を建築することになった。着工は帰国から二か月足らずの八月一日、完成予定は九月十五日であった。新築にあたって彼は特別寄付を依頼し、総額四千数百円の費用のうち大口の寄付としては東西両本願寺からそれぞれ千円ずつ、また勝海舟から百円を受けている。

勝海舟については改めて述べるまでもないが、彼には逸子という娘があり、彼女はのちの男爵、目賀田種太郎と結婚していた。この夫婦が明治十九年十一月に井上円了が結婚するときの仲人をひきうけたという関係で、井上円了は勝海舟と出会ったのである。目賀田夫人によれば、勝海舟のほうでも彼の噂を耳にしている、関心を持っていたようである。あるとき目賀田とともに彼に会って、帰ってから「あんなに若い人であったか」と感心したという。この出会いは、後につきのような形で伝えられている。

勝海舟は井上円了を見て、最初に「おまえは若いな」といった。そして、井上円了が哲学館について説明すると、「やることがよければ必ずできると思うのは間違いだ。いくらよい仕事でも、金がなくてはできない。幕府が倒れたのも金がなかったからだ。おまえさ

んも、そんな議論めいたことばかりいっていないで、なんでも金をつくりなさい。これはほんの寸志だ」といって、百円を寄付してくれた。井上円了はこれに感激し、以後事業をするための教訓としたというのである。

『勝海舟日記』によれば、明治二十二年九月四日が二人のはじめての出会いである。すなわち、校舎完成の間際である。以後、日記には井上円了の名前がひんばんに記され、「哲学館へ百円寄付」「古仏像金子十五円寄付」なども書かれている。井上円了は勝海舟を尊敬し、講演などではよく彼のことを話したという。そして、勝海舟の「書」を寄付者へお礼として贈り、勝海舟は哲学館の教育事業の足しになるならと、自ら「筆奉公」と称して協力を惜しまなかったという。

校舎建築は順調に進んでいたが、九月十一日に多数の死者を出すほどの大型台風が襲来し、完成目前の校舎は倒壊してしまった。このとき井上円了は、仏教公認運動のため京都の仏教教団を歴訪して遊説していたが、電報で知らせを受けると、すぐに東京へ向かった。途中、東海道線が不通となっていたので、四日市から横浜まで船を使った。そして、九月二十日からすぐ再建にとりかかり、十月三十一日に完成、翌日から新校舎での授業がはじ

まった。この思いがけない事故により、費用は予定以上にかかり、落成時には負債が残った。

校舎は二階建てで、教室は一階に百五十人収容のものが、二階に五十人収容のものがあつた。また、校舎とは別に寄宿舎も建て、こちらも二階建てで、七畳二十室で四十人以上が入れるようになっていた。

この校舎は哲学館の所有であつたが、ちょうど柵橋一郎が郁文館（現在の郁文館高校）を創立したため、哲学館の授業のない午前中は郁文館に貸与していた。郁文館は中等教育の場であつたが、哲学館の学生にも英語の授業を受けさせていた。また、井上円了は郁文館の顧問に就任した。

哲学館の改良

麟祥院から蓬萊町の校舎への移転式は明治二十二年十一月十三日に行われた。来賓は加藤弘之元老院議員、榎本武揚文部大臣、高橋五六東京府知事をはじめ、博士、学士、各宗の高僧などあわせて百名、それに学生が参列した。

井上円了はこの日の演説で、まずこれまでの哲学館の開館旨趣を紹介したあと、外遊の結論から導き出した哲学館改良について、四項目をあげた。

第一 わが国旧来の諸学を基本として学科を組織すること

第二 東洋学と西洋学の両方を比較して日本独立の学風を振起すること

第三 知徳兼全の人を養成すること

第四 世の宗教者、教育者を一変して言行一致、名実相応の人となすこと

さらに、「他日一箇の専門学校を開き国家独立の大機関ともいふべき歴史科・言語科・宗教科を分ち日本大学ともいふべきものを組織し、学問の独立と共に国家の独立を期す」と述べて、哲学館を国家の独立を維持するために必要な言語、歴史、宗教を研究する「日本大学の組織」「日本主義の大学」にする決意を明らかにした。

ここでいう「日本大学」「日本主義の大学」とは、組織や学科から教師、テキストまで西洋にならった「西洋の大学」に対する表現であつて、西洋に学ばないということではない。基本にあるのは日本固有のものの改良という考えであつて、そのためには西洋の学問のよい点は活用しようという考えがある。彼はまた、この「哲学館の改良」の方針を、雑

誌や新聞にも発表した。

新島襄は、井上円了の大学設立の趣旨に対して、賛同の手紙を送ってきている。新島は明治二十一年十一月に「同志社大学設立の旨意」を発表、その方針は「国を維持するは、決して二三英雄の力にあらず、実に一国を組織する教育あり、知識あり、品行ある人民の力によらざるべからず。これらの人民は一国の良心ともいふべき人々なり」という言葉に表わされていて、キリスト教主義に立脚した人材養成を目指していた。新島は手紙の中で、民間において大学設立を計画する人は少ないが、自分はその必要を感じて実行しようとしているところなので、ことさらに井上円了の趣旨には賛成であると述べている。そして、なるべくならば「コスモポリタン、ユニヴァルシティー」の大学を設立されるようにと、希望をつけ加えている。

国家の独立

井上円了は演説の中で「学問の独立」といつている。これはこのころ、私立学校の創立者たちによって、盛んに提唱されたことであり、慶応も早稲田も同志社も「独立」「自立」

を標榜していた。

この時代には政府、民間を問わず、「独立」という目標を掲げていたのであるが、特にアヘン戦争以来西欧列強が中国を植民地化し、日本にとっても脅威となっていた状況において、「国家の独立」というテーマは日本全体の緊急課題とみなされていた。そのため、幕藩体制下における地方分散性と士農工商という身分制を打破し国民国家を樹立すること、および欧米列強との不平等条約を改正するための富国強兵政策を実現すること、この二つは明治前期の日本の各層が抱いていた共通目標であった。

政府も人民も「国家の独立」というナショナルリズムの確立においては共通していたものの、しかし、そこには方法上の相異点があった。すでに述べた教育政策における官学と私学の関係のような対立は、明治前期における政府と人民の構造的な関係であり、例えば明治十年代までの士族反乱、自由民権運動、初期帝国議会における藩閥政権をめぐる問題などは、専制的な政府に対する「民」の抵抗とみられる。二十年代に入ってから、政府が国家独立のために欧化主義をとるようになる、これに対して民間の立場からの運動が起こってきた。明治二十一年に結成された政教社が展開した思想運動の背景にはこのような国家の

独立をめぐる政府と民間との立場の違いという問題があったのである。彼らは政府の欧化主義に反対を唱え、「日本主義」あるいは「国粹主義」をスローガンにしていた。しかし、彼らは西洋の学術的文化的知識を持つ新しい知識人であったので、その内容は盲目的排外主義を意味していたのではなく、あくまでも西洋の長所を認めながら、日本固有のものを保存しようと主張していたのである。

日本主義と宇宙主義

井上円了がいつている「日本主義」は、日本という一国に限定されたものではない。移転式に先立って『哲学館講義録』に掲載された「哲学館目的ニツイテ」で、彼は「日本主義」とともに「宇宙主義」を掲げていて、この二つは切り離せないものであることを示している。

日本の独立を達成するためには、少数の学者や上流階級など一部のものだけではなく、国民全体が「独立の精神」を持たなければならないが、それには第一に言語、第二に歴史、第三に宗教を完備する必要がある、これによって「一国独立の風」ができる。これが基礎

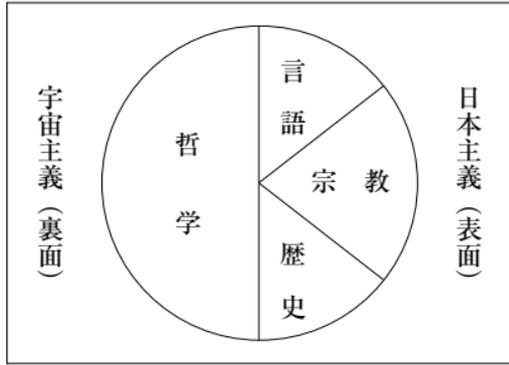


図1 日本主義と宇宙主義

となっていれば、西洋の文物の「消化の輸入」が可能となり、日本的なものに変成して取り入れることができる。したがって、日本の独立は維持することができる。

井上円了は外遊で得た結論をこのようにまとめ、哲学館は将来「日本大学」に発展し、言語・歴史・宗教を一体完全なものとした教育を行い、それによって日本の独立維持の役割を果たすことを目的とすると述べている。

しかし、彼は、この目的は「表面の目的」であって、裏面においてはもう一つ大きな目的がある、という。彼はそれを「宇宙主義」と名づけた。

日本人といえば外国人と区別があるが、単に人間という観点からすれば、地球上いかなる国の人間も変わりがない。また、さらに大きな観点に立てば、人間も植物も「宇宙の一物」にすぎないのである。彼の「宇宙主義」とは、そのような観点を持つことである。そして、それがなければ、理学も哲学も成立しないということになる。

したがって、国家主義（日本主義）と宇宙主義とは決して切り離すことができないものであるばかりか、二つは一つになることによってはじめて完全となる。どちらか一方だけということとはあり得ないのである。彼はこれを図解してみせた（図1）。右側が表面、左側が裏面を表している。表面の日本主義は言語・宗教・歴史によって構成され、日本独立の精神的基礎を確立し、その裏面においては、宇宙主義すなわち宇宙の真理・哲理（哲学）を追究する。彼はこれを哲学館の主義として掲げた。

人間性の重視

ところで、哲学館の移転式の演説で、井上円了は「知徳兼全の人を養成する」ことに触れていた。彼はまた「哲学館の改良」の中でも、知育がいかに進歩しても徳育も平行しなければ効果がないといっている。つまり、知識教育だけでなく、人間性を高めるような教育をしなければならぬという考えであった。しかし、人間性を育てることは、知識を教えるようなわけにはいかない。あくまでも本人が自分のために自覚し、実行することが重要である、というのが井上円了の方針であった。彼は、このような人間性の育成を重視

し、その具体的な方法として「寄宿舎」をつくった。

井上円了は、学生時代は社会的な拘束のない自由な時期であり、貴賤貧富にかかわらずどのような人とも交われる時期でもあるので、「人間一生の春」だと考えた。学生が自由を求めて行動することに対して、学校ではさまざまな規則を設けて学生を束縛することが一般的である。しかし、哲学館ではこのような方針をとらず、そのため寄宿舎でも細かい規則の網を設けず、寛大なる人間性をもって対応することとした。行為に関する善悪の判断は学生個人の道徳心と自覚に任された。決して規則でもって「制裁」を加えることはしなかった。

この考えをさらに進めたのが寄宿舎生を対象とした「茶会」である。茶会は外遊中に見たイギリスの家庭のだんらんヒントを得たもので、ここで彼は学生とともに談笑したり遊んだりして、人間性の育成に役立てようとした。茶会は明治二十二年十一月十五日からはじめられ、当初は毎月二回であったが、その後、毎日朝夕二回開かれるようになった。つぎの資料は後年のものであるが、土、日の茶会の雰囲気を書いている。

「土曜の夜には、寄宿生は一同連れ立って井上先生のお宅に参り、八畳の座敷に円座し

て、先生からいろいろと修養上のお話を承ったものである。日曜の朝八時には、先生は必ず寄宿舎に来られて、舎生一同としんみりとお話をなされた。先生のおいでのなるに先立って、舎生一同が各自の座布団を全部重ねてお待ちしていると、先生はつかつかとその高く重ねた座布団の上に座られ、慈父のごとき暖かいお心持ちで、いろいろと学問上、修養上のお話をなされた。この土曜日と日曜日の会合が、舎生一同のもっとも誇りとしかつ楽しみとするところであった」

対話の精神

茶会は人間性の育成を目的としていたが、そこには井上円了の教育の基本的な姿勢がよく表れている。その基本とは、「対話」である。彼は決して自分の考えを強制することはなく、自分の意見を出しても、その是非については学生個人の自覚と選択に任せた。

対話の姿勢を象徴するような例がある。当時、多くの学校で学生が講義内容を不満として教師排斥運動を起こしていたが、哲学館でも教育学の講義に対して不満が出て、学生が館主の井上円了に講義の中止を申し入れた。そこで彼は自分が学生とともにその講義に出

席し、終了後に討論会を開いて、教師と学生の双方の意見を明らかにして、改善策を探ったのである。

また、井上円了は学生に偏見を持たないようにと指導していた。授業の中で仏教家を例に取り上げて、「すべてのことを仏教で解決できる」という独断的な風潮があることを指摘し、このように他の説はことごとく顧みるに足らないというのは狭量な偏見にすぎないとして、広い視野からのものの見方、考え方を学ぶように注意したという。

彼は新しいことを積極的に学ぶ姿勢も大事にしていた。当時は進化論はまだ新しい思想であったので、盛んに論じられていたが、彼は欧米留学で勉強してきたばかりの人を講師に招いて、自らも学生とともに講義を聴いたりした。

このように教師と学生がともに交わり、教育の場で互いの人間性を尊重し合うことを「私塾の精神」という。井上円了は思想錬磨の術として哲学を基本とした教育によって、この精神を実現していたのである。

④ 哲学館の教育目的

専門科の設置計画

井上円了は哲学館を改良して「日本主義の大学」へ発展させることを目指していたが、そのためにまず専門科を設ける計画を発表した。

明治二十三年（一八九〇年）九月の趣意書では、従来の修学期間三年を普通科とし、その上に二年の専門科を設置するとした。計画段階では、専門科は国学、漢学、仏（教）学、洋学の四科からなり、十万円と見積もられた費用の半額に寄付金が達した時点から一科ずつ順次開設される予定であった（最終的には洋学科は設置されなかった）。この寄付を募集するために十三条からなる「寄付金規則」を設け、この中で、寄付金の額によって「寄付者」「館友」「館賓」「特別館賓」などと称し、それぞれに証票や感謝状を贈ったり、恩典を与えることを定めた。

これまで見てきたように、創立も移転も有志による寄付金が基金となつて行われた。当時、私立学校の主な資金源は授業料であつたが、学生数が少ないため、学校の維持運営にも大きな困難がつきまどつていた。しかし、官学中心主義の政府は援助をしなかつた。そのため、私学が新たな教育事業を展開するためには、寄付金によるしかなく、それぞれに知恵を絞つた方法を考へている。

慶応義塾の場合には、明治十年の西南戦争後に学生数が激減して経営難に陥つた際、政府に資金借入れを申請したが、対応がはかばかしくなかつたため、自力で資金調達の道を見つけないければならなかつた。個人経営の限界を知つた福沢諭吉は、卒業生や彼の共鳴者に呼びかけて「社中」という組織をつくり、彼らからの募金を学校の資本とした。この制度がのちに役立って、明治二十三年に他の私学に先がけて「大学部」を設置することができたのであつた。

全国巡講

それでは哲学館は専門科設置に必要な十万円をどのようにして集めたのであろうか。井

上田了は明治二十三年七月二十一日付けの勝海舟宛の手紙で、哲学館の経営の見通しが立たず、秋から予定している専門科開設のための資金募集の方法についてもよい手段がないと書いている。しかし、このときすでに、彼は全国巡講の予定を立てていた。つまり日本各地を講演して歩きながら、哲学館の教育の趣旨を説明し、寄付を募ろうというのである。彼が出発を予定していた日の四日前、すなわち十月三十日に「教育勅語」が發布されたので、彼はこの巡講において教育勅語に関する講演も行い、その普及にもつとめた。

全国巡講は、明治二十三年から二十六年まで行われ、彼は精力的に日本各地を歩いた。記録（『哲学館報告 明治二十六年度』）によれば、二十六年六月までの足かけ四年間に、「一道一府三十二県、四十八か国、二百二十か所を巡回し」、演説の回数は八百十六回に及んでいる。講演日数をのべて示せば、三百九十日、つまり一年一か月になる。当時は現在のように交通機関が整備されていたわけではないから、この巡講は想像以上に困難な旅であったが、これを支えたのは三十代半ばという彼の若さと教育への情熱であった。

また、彼は館主の立場として自己を見直し、生活のあり方を変えた。名刺に「禁酒・禁煙諸事儉約」と印刷し、実行した。時には寄付を依頼するのに「香典先払い」などという

形をとったため、一時は世間から誤解されたこともあった。

このように苦勞して集めた寄付金の総額は、八千二百五十余円であった。

ところで、この少し前から同志社の新島襄も大学設立を期して、募金活動を展開していた。彼は明治二十三年一月、募金に歩いていて途中で病死し（四十八歳）、その目で夢の実現を見ることはなかった。このときの後援者と寄付金額が新聞に公表されているが、政界や実業界からの寄付が多く、例えば大隈重信から千円、洪沢栄一（実業家）から六千円、岩崎弥之助（三菱会社社長）から五千円など、十一人で三万一千円が集まっている。哲学館の場合と比較すると、資金募集の方法は根本的に異なっている。井上円了は創立以来の方針として、あくまでも民衆を基盤とした学校づくりを貫いていて、哲学館では教育対象もそれを支える後援者も日本全国の民衆であるという認識のもとに行動していたのである。

民衆に哲学を

井上円了の全国巡講には、単なる募金活動以上の意味があった。哲学館への協力を得るためには、まず哲学館の教育や哲学について理解してもらわなければならない。したがっ

て、彼が全国各地で行った講演は、そのまま哲学の民衆への普及活動にもなっていたのである。それは大いに成果を上げた。

井上円了は、明治二十六年一月に熊本県知事の依頼で、哲学の効用について講演をした。会場にあてられた熊本市内の大劇場につめかけた数千人の聴衆はみんな彼の二時間にわたる熱を込めた講演に感動した。このとき第五高等学校（現在の熊本大学）教授だった内田周平は聴衆の反応を見て、井上円了とともに喜びを分かち合ったという。

内田は、井上円了の講演や著作が女性や子供に至るまでの広範囲な人々に哲学の名を伝える役割を果たしたことについて、その理由をつぎのように分析している。

「一番感心なのは、原語を訳しても、原語そのものを用いることがなかったことです。あれだけはほかの人にはできません。その時分はハイカラがってよく原語を使ったものですが、彼は原語を使わないし、解釈もなるべく平易に訳してありました。これは演説のときでも変わりがありませんでした。それだけは偉いと思います。自分の腹の中で消化してしまうのですから」

つまり、彼はむずかしい哲学用語などを使わず、すべて自分の中で消化したものを自分

の言葉にして語ったので、それが哲学の知識のない人々に哲学への関心を植え付けるうえで、もっとも適した方法だったのである。そのため、彼の講演を聞いた人が子供や知人に哲学館への入学を勧めたという例も少なくない。

彼は民間の立場で哲学を民衆に広めることを使命と考えていたが、それは著作や講演によるばかりではなかった。明治二十三年からは哲学館内で「日曜講義」という講座を設け、社会人に哲学館を開放するようなことも行った。今日でいう公開講座である。

誤解される「哲学」

全国各地において、哲学の普及を目指した井上円了は、「哲学の大家」として優待され、また哲学に関する講演を依頼された。しかし、この全国巡講の状況は必ずしも一様ではなかった。熊本市での例のように、満堂の聴衆に向かつて熱演する場合もあれば、集まる人も少なく空しく柱を相手にして演説することもあった。このような講演の盛況や不況は、人々の哲学に関する誤解に起因することが多かった。それについて、井上円了はつぎのように記している。

「誤解の代表的なものは、哲学を禪や仙人の学問と考え、よほどおもしろいことを説く、奇々妙々の学問という考えです。そのためつぎのようなことがありました。

哲学者っていうのはひげが長く、身は軽く、仙人のような人で、今度、東京よりその大家がきて話をするそうだと、ということ、おもしろいものをみたいという人々が旅館の前にたくさん集まっていました。ところが、私のように仙人らしくない人物が到着したので、人々の中には、哲学者をいつわるにせ者が井上円了の名前をかたってきた、といいふらすこともありました。

またあるところでは、私のことを、鍛冶屋の先生、という人がいました。それは、テツガク、という言葉で、鉄学、と誤解したからです。

そのほか、哲学はあらゆる学問に通じ、なにひとつわからないことはないものだというところからの、いろいろな誤解が生まれ、詩や俳句の添削を請う人、書画骨董の鑑定を頼む人、はなはだしい場合は茶の湯や生け花の品評、人相手相の判断を頼む人もあって、これには閉口しました。

しかし、このような誤解はまだいいのですが、私が残念に思ったことは、哲学がおもし

ろいにせよ、むずかしいにせよ、家を富まし国を強くすることに關係なく、実用的な學問ではないと考へている人が、百人中九十九人までいたことでした。ですから、哲學を勉強することは、道楽者か物好きがやるものにとらえられていたのです。そのため私は、できる限り哲學をわかりやすく人々に話すことにつとめました」

哲學は思想鍊磨の術

井上円了は全國巡講をしていて、いつも同じ質問を受けたという。それは「哲學とは何か」そして「哲學は必要なものなのか」ということであつた。地方では、哲學を理解する人はまれで、學ぼうという人はまったくいなかったので、彼らは哲學は容易に理解できない至難の學問であり、日常的に役立つものではないと受け止め、哲學者を奇人や偏屈人と見ていた、と彼は記している。こういう誤解を解くためにも彼の講演は必要だつたが、先の質問に対する回答は、雑誌『天則』に掲載された「哲學ノ効用」に端的に示されている。彼は、哲學は「士農工商誰人にも」つまり万人にとつて、「思想鍊磨の術」として必要な學問だといつている。その効用について要約すると、つぎのようになる。

人間は肉体と精神の二面を持っている。肉体を錬磨する方法として運動や体操があり、これによって健康を維持しているが、精神面でも同様のものが必要である。哲学はそのための学問であり、思想錬磨の方法である。ニュートンの万有引力やコペルニクスの天文学上の発見などは人間の思想活動によって想像力（創造力）が高められた結果であるが、思想や精神は決して自然に発達するものではないので、身体を鍛えるのと同様に精神を訓練する必要がある。それが哲学を学ぶことである。哲学はものの見方、考え方の基本であって、学生時代に哲学を学び、思想を錬磨し、他に応用する能力が身につけば、それでよい。研究者にでもなるのでなければ、特に学者の諸説を暗記する必要もない。以上のように、哲学は普通教育として、思想錬磨の術として万人に必要なのである。

そして、哲学館の教育の基本は、この「哲学を学ぶこと」であった。

教育家と宗教家の養成

創立から五年もたつと、哲学館の名だけは全国的に知られるようになったが、そこではどのような学科を教授し、どのような人物を養成するのかという具体的な教育内容につい

ては、まだほとんど知られていなかった。井上円了が大学設立に向けて、より明確化した哲学館の教育目的は、だいたいつぎのように説明できる。

当時の帝国大学は、現在の学部にあたる法科大学、医科大学、理科大学、文科大学の四つにわかれていたが、これに対応して法律関係の私立学校は法科大学を、医学関係のものは医科大学を目標において、それぞれ帝国大学の課程の速成をうたっていた。そして、例えば、英吉利法律学校（中央大学）や明治法律学校（明治大学）などの五大法律学校と称されたものは裁判官や代言人（弁護士）の養成を、また済生学舎などの医学校は医者養成を具体的な目的として持っていた。一方、哲学館は文科大学の速成科たるべきことを目標として設立された。文科大学は哲学者、史学者、文学者などの学者を養成する場であったが、哲学館では学科の内容などは文科大学と同じとしながらも、目的は哲学を直接に应用する教育家と宗教家の養成であった。

教育家とは具体的には教員になることであるが、教員にもいくつかのレベルがあつて、井上円了が考えていたのは中等教員であった。中等教員免許は帝国大学卒業生に対して特権的に与えられていたが、明治十九年に文部省は尋常中学、同師範学校および高等女学校

の教員免許を検定試験合格者に与える制度を改正し一般に開放した。そこで、井上円了は、法律学校が代言人免許を望む者を、また医学校は開業医試験を目指す者を養成するように、哲学館では教員検定試験の受験者を養成しようと考えた。そのために、やや高等な教育、倫理、史学、文学を教授することとした。

哲学館はさらに帝国大学に与えられていたような教員免許無試験検定の特典を取得しようとして、明治二十三年に文部省に申請したが認められなかった。明治二十七年には国学院とともに二度目の申請をしたが、このときも特典は得られなかった。文部省としては私立学校に官学と同じ権利を与える意志はなかったであろう。結局、特典を取得するのは明治三十二年になってからだ。これはのちに「哲学館事件」へとつながっていくことになる。

彼が教員養成に重点をおいた背景には、一つの大きな構想があった。彼は哲学館の教育を小学校以上の中等教育を普及させる形で具体化し、哲学館の卒業生が全国で私立の中等学校を設立・運営していくという、民間教育構想を抱いていたのである。具体的には、地方都市にその地域の民力に応じた簡易中学のような私立学校を設立することであった。校舎は寺院の余地のあるものを借り、生徒数は戸数千戸に対して三十人程度とする。また、

欠如している女子教育にも力を入れる。場合によっては、地域の実情にあわせて、冬期学校、夜学校、貧民学校、幼稚園を併設することも考えていた。

一方、宗教家についての考えはこうである。当時、仏教系の私立学校はいくつかあったが、すべて各宗各派の仏教教団が設立したもので、それぞれの僧侶養成を目的として、宗派の学問を専門としていた。井上円了は、将来の宗教家のあるべき姿として、まず東西両洋の哲学を学び、それから専門の修行をするなり、各宗派の学校でそれぞれの教義を学ぶことが望ましいと考えていたが、哲学を教授する学校は帝国大学しかなかったので、それを哲学館で行おうとした。

また、井上円了は、宗教家すなわち仏教家を教育家とも結びつけて考えていた。仏教が隆盛だった江戸時代には、学問教育は仏教家が掌握していたが、明治になって仏教家の学識が低下して教育に携われなくなっていて、これが仏教衰退の原因の一つでもあると彼は考えた。そこで、仏教家が教育家を兼務できるようにすれば、仏教の勢力を回復することにもつながる。そのためにはまず仏教家の学識を中等以上のレベルに高める必要があり、これを哲学館の急務とみなした。

このように東西両洋の哲学を基礎としてさらに哲学を応用するという意味で、教育家と宗教家はまさに社会に適合した職業であり、これらの養成が哲学館の目的とされたのである。

学制の改革

明治二十八年、哲学館に緝熙館（じゅうきかん）という中学科（予科）が設立された。これは中等教育の速成を志すもののために設けられたものであり、また哲学館の本科への入学準備をするためのものでもあった。ここでは一年間で修身、漢文、数学、心理、作文などが教授された。

また、同年からは入学試験が実施された。それまでは学問を志す人にできるだけ門戸を開放するという趣旨から試験は行われなかったが、入学希望者の増加が著しく、また教育上の観点から一定の学力を求めめることも必要だったので、試験が実施されるようになったのである。

入学試験の開始と同時に、学科の改革が行われた。内容は哲学館を教育学部と宗教学部

にわけて、それぞれ予科（一年）と本科（二年）の二科とするもので、井上田了が考えていた教育家と宗教家の養成という目標に対応したものであった。